

近世庄内歌壇における『後撰和歌集』注釈考 ―『後撰老のすさび』の慶長本注記を中心に―

藤田洋治

(地域教育文化学部客員研究員)

河井謙治

(元大東文化大学)

古田正幸

(大正大学)

はじめに

近世後期の庄内藩において和歌活動が盛んとなるのは、九代藩主酒井忠徳(一七五五―一八一二)が和歌を愛好し堂上歌人たちに師事した頃からである。その影響から女流歌人・杉山廉(一七三五―一八〇八)を中心に和歌活動が活発となり、白井固(一七七一―一八三三)や池田玄斎(一七七五―一八五二)、建部山比子(一七七八―一八三九)石田畔見(一七六四―一八二三)たちが活躍する、庄内歌壇とも言うべき活況を呈した。

その庄内歌壇は、和歌を詠ずるばかりではなく、和歌作品の注釈作業を行っている点特徴であると思われる。白井固は、小倉百人一首の注釈『百首略解』を著しただけでなく、古今和歌集の講義

近世庄内歌壇における『後撰和歌集』

を行い、その内容を『鏡の塵』として纏めた。残念ながらその著書は現存しないが、その弟子・中村知至によって『古今和歌集遠鏡補正』として橘守部や白井固の序を付して天保一四(一八四三)年の序文をもって江戸で刊行されている。書名から想像できるように本居宣長『古今和歌集遠鏡』を丁寧に通読した上で、それを補った注釈書である。また池田玄斎は往古からの庄内歌人の詠作に自分たちの和歌をも加えて『大泉歌集』を著している。

その後、池田玄斎の弟子・服部正樹(一八一七―一八八九)は、古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集、いわゆる三代集の全歌に注釈を施した『古今老のすさび』・『後撰老のすさび』・『拾遺老のすさび』を著している。自筆本が鶴岡市郷土資料館に所蔵されているものの、今まではほとんど言及されてこなかった注釈である。その中の、後撰和歌集の注釈『後撰老のすさび』の中に、慶長本についての記述が見られ、本稿はその内容について考察を試みるものである。なお、以下、本稿では『後撰老のすさび』を『老のすさび』と略称する。

慶長本は、本文そのものが校異本文としてのみ存在する特異な伝本で、中村啓信^(注3)、岸上慎二^(注4)、小松茂美^(注5)、片桐洋一^(注6)の各氏によって論じられ、それらの考察をふまえ杉谷寿郎氏が『後撰和歌集諸本の研究』^(注7)で詳細な調査・考察を加えられ、定家本以前の本文で、

古本系統の特徴を持つとされているものである。その慶長本の校異本文が『老のすさび』にも見られるのである。さらに、妹尾好信氏は、『後撰和歌集標注』^(注5)（以下、『標注』と略称する）の解題で杉谷氏の考察を承けて、『標注』における慶長本について、安永二（一七七三）年に萩原宗固が校合した本文をそのまま利用しているとその著者・岸本由豆腐自身が記していること、現行本には見られない和歌が一二首あると指摘していることなどにも触れ、一二首は実際には一四首であること、及び歌序の相違が一五箇所見られ、そのうち一一箇所が雲州本と一致することなどから、雲州本に近い本文であることを指摘しておられる。

以前の論考^(注9)で、『老のすさび』は、中山美石『後撰集新抄』とこの『標注』とを参考に行っていることには触れたが、その実態については課題も残っていた。そこで、本稿では、『老のすさび』における慶長本の注記と『標注』とを比較することで、より詳細に検討を加えていく。

一

『老のすさび』における慶長本の異文注記は、「慶」として掲げたものが八二箇所存在する。その八二例全てを掲出することは避けるが、『老のすさび』と『標注』の傍注を比較しておきたい。

以下、漢数字で本節における通し番号、『新編国歌大観』歌番号、該当部分の傍注を挙げていく。なお、『老のすさび』は自筆本を使用した¹⁾が、漢字は現行の字体に改め、句読点、濁点を付している。また傍注ごとに数えているため、一首で二箇所と数えている場合もある。

- | | | | |
|---|------|--|-------------------------------------|
| 一 | 522 | 歌二句（老のすさび）わがまつ山に ^{のは慶} | …（標注）我まつ山に ^{は慶} |
| 二 | 522 | 歌結句（老のすさび）ぬる、袖かな ^{の慶} | …（標注）ぬる、袖かな ^{は慶} |
| 三 | 614 | 歌結句（老のすさび）われはき、つる ^{ケ慶} | …（標注）われはき、つる ^{け慶} |
| 四 | 1173 | 歌上句（老のすさび）身をうしと人しれぬよをたづねこし ^{に慶} | …（標注）身をうしと人しれぬよをたづねこし ^{て慶} |

『老のすさび』と『標注』の慶長本注記の一致する五例（四は二箇所と算出）を掲出した。全体を調査すると、一致するものはさらに七一例に上る。この合わせて七六例は、全体の慶長本注記八二例中、約九三%となり、『老のすさび』の慶長本注記は『標注』の慶長本注記とほぼ一致するよう²⁾に思われる。

しかし、『老のすさび』と『標注』の慶長本注記が一致しない例もある。次にその例を示してみる。

五 828 歌四句(老のすさび) 跡やたづぬる六帖注慶長本

…(標注) あとやたえぬる

六 1197 詞書(老のすさび) 時おとろへありしときめかりし給はざり慶

…(標注) 時おとろへありして慶

七 1253 詞書(老のすさび) まかりけりたれば慶

…(標注) まかりけりければ慶

八 1253 詞書(老のすさび) この老かけをこせてにそへて慶

…(標注) このおいかけをこせてにそへ慶

九 1417 歌三句(老のすさび) うつりせばそへも慶

…(標注) うつりせばそへもイ

五では『老のすさび』本文は「たづぬる」であり、『老のすさび』は『標注』本文、慶長本、古今六帖の他文献により「たづぬる」の「づ」にミセケチを施し「え」と傍注して、本文を校訂していることがわかる。しかし、『標注』においては傍注は施されておらず、『老のすさび』は『標注』に慶長本の注記がないにもかかわらず、『標注』の本文を慶長本ならびに古今六帖と同じ本文であると判断

したと考えられる。

六は「慶」の注記から慶長本の本文を挙げる形式となっているものの、『標注』の「慶」注記の内容とは異なる本文を挙げている。少なくとも『標注』の当該部分からは考えられない本文となっている。しかし、『標注』の詞書全体と比較するとその理由が推測できるように思う。

法皇かへり見給ひけるをのちくは時おとろへありしやうにもときめかりし給はざり慶あらずなりにければさとにのみ侍りて奉らせけるり慶(標注 1197 詞書)

『老のすさび』の慶長本異文「ときめかし給はざり」は、『標注』の「あらずなりに」に付された慶長本注記を誤って「時おとろへ」の箇所転写してしまった誤謬ではないかと思われるのである。『老のすさび』の詞書全体は次のようになる。

法皇のかへり見たまひけるをのちくは時おとろへありしやうにもあらずなりにければ里にのみ侍りてたてまつらせける

また、この『標注』には四箇所慶長本注記が見られるのに対し、『老のすさび』は、この一箇所のみを異文として引用していることもわかる。

七は、『標注』の「ければ」を「たれば」と誤写したものである。八は、『老のすさび』の本文の後半「をこせて」に対する「にそ

へて慶」の注記は、『標柱』と一致するものの、『標柱』にある「この」に対する「慶ナシ」の注記を直上であるにも関わらず、採用していないため、不一致の例とした。恐らく書き落としたものと考えられる。

九では、『標注』の「そへもイ」という注記を慶長本注記として『老のすさび』が引用している。これは単純な誤写の可能性が考えられる。

このような一致しない例においていくつか問題点はあるものの、大枠では一致しないといっても『老のすさび』の引用の際の誤謬と考えられる範囲のものと思われる。『老のすさび』の著者・服部正樹が慶長本を実際に見たとは考えにくく、注釈の際に『標注』の注記を参考に慶長本の本文に言及した可能性が考えられる。

二

『老のすさび』には、前節で述べた「慶」の注記による慶長本の指摘の他に、「慶長本」と言及した引用が見られる場合がある。全部で二六例に上るが、その箇所について検討してみたい。本節では、まず『標注』に慶長本の詞書や和歌の全文の引用があるものを検討する。

前節と同様に、漢数字で本節における通し番号、『新編国歌大観』

歌番号、該当部分については『標注』の詞書および和歌を先に掲げ、続けて『老のすさび』の該当部分を引用した。

一 606 詞 標注 年月をへて忍びていひ侍りける人に慶長本

忠房朝臣

かくれぬにしのびわびぬるわがみかなるのかは
づと成やしなまし

老のすさび 慶長本二 年月を経て忍びていひ侍りける人に

忠房朝臣

かくれぬにしのびわびぬるわが身かなるのかは
づとなりやしなまし

二 1208 詞 標注 はらからのなくなりたるをなげくころ慶 題しらず いせ

老のすさび 題しらず 伊勢

はらからのなくなりたるをなげく頃 慶長本

一は、詞書を引用しているものだが、『後撰和歌集』の流布本や天福本などでは、前歌の詞書「人を言ひはじめむとて」の詞書がかかる箇所である。『標注』において、「慶長本」として引用した詞書を、『老のすさび』は「慶長本二」としてそのまま引用している。

二も、詞書を引用した箇所である。『標注』の形式に倣って、「題しらず」は残したままで、慶長本の詞書を傍注の形でそのまま引用している。

なお、一には注釈部分に慶長本に関する記述は見られず、また、二の注釈部分にも伊勢集の本文に関する記述はあるものの、慶長本については記述がない。

三 1203' 標注 慶長本題しらず 元方

たつた川たちなば君が名ををしみいはせのもりのいはじとぞ思ふ

老のすさび 慶長本に此次に、題しらず、元方、立田川立なは君が名を、しみいはせの杜のいはじとぞ思ふ、今本此歌なし。

この例では『老のすさび』の頭注部分に、「慶長本」の記述が見られ、正樹自身が記すように、この和歌は流布本にはこの位置に存在しないものである。『標注』に従って、慶長本にはここにもこの歌があることに言及していることになる。

四 1312' 標注 慶長本 心ざしありていひ侍りける男のやんこ

となき事にてとほき所へまかりけるに
山のはにかゝる思ひのたえざらばくもあながらも
あはれと思はん

老のすさび
此次に慶長本に、心ざしありていひ侍りけるをとこのやんことなき事にてとほき所へまかりけるに山のはにかゝる思ひのたえざらばくもあながらもあはれと思はん

女のよめるにて、こゝろざしありて物いひけるにとあるにありてかゝる思ひとはいへり。さる心の絶えずしもあらばといひて山には雲のかゝるよりよせていへり。雲ながら云々は、とほき所へ行は(マ)にあたりて遙かなる意。すべての心は、こゝろざしふかく思ひ絶えずしもあらば雲のよそも遙けくありぬともあはれとは思ひたのみてんとなり。

この例では、『老のすさび』は「君が手を」(二二二二番歌)の注釈に続いて、やや小字で詞書・和歌そして注釈を記している。

『標注』においても小字で補われた詞書と和歌で、『標注』には頭注などは見られない。しかし、『老のすさび』では詞書・和歌とも

に、注釈をも付している。

なお、『標注』が流布本にない慶長本の歌を挙げる例は全部で一四首見られる。しかし、『老のすさび』が『標注』の挙げる慶長本の歌を挙げるのは、三・四の二例のみであり、注釈をつけたのは四の例が唯一である。四の歌は、『後撰和歌集』の流布本本文では、七六三番歌に見え、慶長本において重出していたものと見られる。『老のすさび』も、七六三番歌には別途、次のような注釈を行っている。

文などおこするをとこ、ほかさまになりぬべしとき、て

藤原真忠がいもと

右大臣恒佐四男、天慶六年右少将、天曆五年左馬頭。

山のはにかゝる思ひのたえざらば雲あながらもあはれと思はむ

端詞のほかさまは、国の官などになれるにや。まだ大内（つぐな）ながらも、外さまにつかふるにもあるべし。初句の山のは、下に雲をいはんとて、其縁にて雲のかゝるといひ、意は斯るにて、文などおこすまめなるこゝろの絶えずしもあらば也。雲あ云々は大内につかふる身をそへて遠く遙なるともあはれと思ふべしにて、あさからぬこゝろをば忘れはせじと也。

この七六三番歌の注釈は、『標注』所引の慶長本本文に対して、

『老のすさび』がわざわざ付けた注釈とは内容が異なっている。大きく解釈が相違するわけではないと考えられるが、改めて説明を考えたようである。その理由は不明であるが、少なくとも服部正樹は、流布本に対する重出歌であることに気が付いている様子がないことにはなる。

以上四箇所が『老のすさび』が「慶長本」形式で本文の引用を行った全ての例である。これらが必ずしも『標注』所引の慶長本注記に対して一貫した態度を取り得ていないことは気掛かりなところである。なぜこの四箇所なのか、また採り入れた例がそれぞれ形態を異にしている理由は何なのか。その理由もやはり不明とするしかない。

三

次に、『老のすさび』の和歌本文に「慶長本」の異文注記があつて、さらに注釈部分に慶長本に関する記述が見られる場合について検討する。なお、内容としては前節に関係が深いため、通し番号は前節から続けて振り、引用の方法も前節と同様とする。

五 828

標注

慶長本後「たちかへるよの家集
六帖集たちまるとら六帖集イ
白浪のうちいつる浜のはま千鳥あとやたえぬる

しるべなるらんし慶集

老のすさび
しら波のうち出る浜のはま千鳥跡やたづぬるしたちかへるよの家
立よるうらの六帖
るべなるらんし慶

六 1059

標注

慶長本前
せをはやみたえずながる、水よりもたえぬもよどまぬ能
つき拾遺
のは恋にぞ有ける恋なりける集

老のすさび

せを早みたえずながる、水よりも絶せぬぬものよどまぬ
は恋にぞ有ける涙けり慶

(上略) また尋ぬとあるも文をしるべにして
逢はん事を思ふよしともすべけれど、六帖、
慶長本、続後撰ともに「絶ぬる」とあるによ
り、しるべもしるしとある慶長本によれり。

(以下略)

この例において、『標注』の注記「慶長本後」は、流布本と慶長本との和歌の配列が前後している時に付けられる注記である。これについて、五の例では『老のすさび』には言及がない。なお、慶長本の和歌配列については、『老のすさび』には、この例だけでなく全てにおいて記述がないことが確認できた。

また和歌本文に関して、前述のとおり『標注』には慶長本の異文注記がないが、『標注』の本文に異文注記がないにもかかわらず、慶長本の本文も『標注』と同じと判断した上で、「絶えぬ」という本文を採用しており、『標注』の慶長本の「しるし」をも取り入れている。『老のすさび』の注釈は、右のような手続きの結果、注釈においても「慶長本」に拠ったことを説明している。

たえと云詞二所にありて耳立つなるに慶長本
と云には四ノ句よどまぬといひ、結句なみだ
也けるとあるはまさりて聞ゆるにや。一首の
意は、瀬早く絶えず流る、水よりもと譬へ
て、それにも勝りて世中に絶せぬ物は恋にて
はある也と、みづから人をこふる心のたえせ
ぬより世上すべての意にはいひつるなるべ
し。されど猶慶長本のよどまぬ云々と続けた
る、瀬を早みといひ出せるにもよく叶ひて、
結句涙也と、ぢめたる、いともくつきぐ
しくよろしきや。

『老のすさび』の注釈は、まず流布本本文に「たえ」という語が二箇所あることを批難し、慶長本本文には四句目「よどまぬものは」とあることに注目する。こちらの本文を採用すれば、「たえ」

が一度しかないことになる。全体の大意を述べた後に、慶長本の「よじまぬ」が初句「瀬を早み」とも合うとして「いとものもつきづきしくよろしきや」と結ぶ。慶長本の本文の良さを称賛するのである。慶長本の本文によって、本文批判を試みる姿勢は、以下の例でも同様である。

七 850 標注 なげ、どもかひなかりけり世の中になに、くやしく思ひそめけん

老のすさび なげ、どもかひなかりけり世の中になに、悔しく思ひ初けむ

(上略) 慶長本の、かひなかりける世の中をとあるぞ、ことわり明らかにてよろしきや。(以下略)

八 988 標注 よそなれど心ばかりはかけたるをなか思ひにかわかざるらん

老のすさび よそなれど心ばかりはかけたるをなかおもひにかはかざるらむ

よそはよそ、外の意。なれど、ても聞えざるにあらねど、慶長本なるながらとある方をと

る。(以下略)

九 1159 標注 とりもあへず立さわがれしあだ浪にあやなく何に袖のぬれけん

老のすさび とりもあへず立さわがれしあだ波にあやしやなに、袖のぬれけん

(上略) また慶長本にはあやなくと有。こは、わからぬもなくといふ意也。(以下略)

一〇 1173 標注 身をうしと人しれぬよをたづねこし雲の八重たつ山にやはあらぬ

老のすさび 身をうしと人しれぬよをたづねこし雲の八重たつ山にはあらぬ

(上略) 慶長本に、人しれぬよにたづねてしとあるによらば、人にしられぬ時に尋ねたりしとなりて、人に知られん事を恥思ひ密に尋ねたりし意とはなる也。(以下略)

一一 1204 標注 かなしきもうきもしりにしひとつ名をたれをわくとか思ひすつべき

かなしきもうきもしりにしひとつ名をたれをわくとか思ひすつべき

老のすさび

かなしきもうきもしりにしひとつ名身をたれをわくとか思ひすつべき

かけうた（引用者注＝贈歌を指す）の一二句の句を下上にして、しか思ふ心は我もおなじにて、ひとつことなり。慶長本には名を身とせる方によるべし。名としてはわきまへがたし。たれをわくは、そこが思ふも我が思ふも唯同じにて、しりてある身なれば、そこよ、われよと異物にしてわけへだつべきに非ずとなり。

一二 1226

標注

思ひてでのけぶりやまさんなき人の仏になれるこのみ見は君よ

老のすさび

おもひ出てのけぶりやまさんなき人のほとけになれるこのみ見は君よ

思ひ出のとは、理いかゞぞや覚ゆ。慶長本のてと有方をとる。（以下略）

一三 1309

標注

このたびもわれをわすれぬものならばうち見ん

老のすさび

たことびに思ひ出なん

此たびもわれをわすれぬものならばうら見んたしびに思ひ出なん

このたびもは、慶長本のしとある方よろし。うち見んたびは、燈を見ることにおもひ出てよとなり。火打はうちて火を出すより見るにかね、また思ひに火をそへて火出よの意也。たびを慶長本にはごとにとあり。さてもあるべし。

一四 1397

標注

なくなみだふりにしとしのころもではあたらしあきにもかはらざりけりれ

老のすさび

なくなみだふりにしとしの衣手はあたらしあきにもかはらざりけりれ

（上略）慶長本、あらたまれどもとあるぞ理よく覚ゆかし。去年の衣を今年かぶるよし続けたり。（以下略）

一五 1405

詞 標注

老のすさび

女助四子のみこのかくれ侍りにけるととき
女助四子のみこのかくれ侍りにけるととき

此はし詞、慶長本、みまかりてのち云々とあるぞ、結句尋ぬべきかなとよめるによくかなひて覚ゆ。（以下略）

以上、九例について個々の事例への説明は避けるが、慶長本の本文について七「ことわり明らかにてよろしきにや」、八「慶長本なるながらとある方をとる。」一「慶長本には名を身とせる方によるべし。」、一二「慶長本のとてと方をとる。」、一三「慶長本のしとある方よろし。」、一四「理よく覚ゆかし。」、一五「よくかなひて覚ゆ。」などと評し、慶長本本文の優位性を強調していることは明白である。服部正樹は、ことさらに『標注』の校異本文でしか知り得ない慶長本を優れた本文として認識していたことが窺えるのである。

注意を要するのは、一三の例で「たびを慶長本にはごとにとあり。さてもあるべし。」と、『標注』にある異文注記を『老のすさび』が採用していないにも関わらず、慶長本の本文に触れている点である。さらに、九の例で、四句目を「あやなくイ」と『標注』の本文を異文として注記している上に、それを慶長本と誤認している点も注意させられる。異文に対して誤謬が多く、誤った認識も見られるのである。

一六 1364 標注 くさまくらもみぢむしろにかへたらば心をくだくものならましや

老のすさび 草まくら紅葉をこひ慶むしろにかへたらば心をくだくものならましや

もみぢむしろてふ詞解しがたし。季吟抄には、秋興の時をさすといへどもかくのみいひてさる意とは聞えがたし。慶長本、紅葉を恋にあるに従ふべし。（以下略）

この例でも「慶長本、紅葉を恋にあるに従ふべし。」と慶長本本文を尊重する姿勢を示している。ここでは北村季吟『八代集抄』^(注10)の注を引用しているが、その本文は次に示したとおりである。

草枕は旅ね也。紅葉筵は、秋興の時なるべし。今の旅ねを、彼秋興の時にせましかば、かくは、旅懐の心をくだかんやとなるべし。

この「紅葉むしろ」に関しては、服部正樹が参考にしたはずの『後撰集新抄』でも、また現行の注釈書^(注11)でも「紅葉を筵として敷いたならば」というような解釈が一般的であろうと思われるが、季吟の解釈を「解しがたし」として、あえて慶長本本文を重んじて解釈

を進めるのである。『老のすさび』には、このように慶長本文への傾倒が看取される箇所も見られるのである。

四

『老のすさび』の注釈における慶長本尊重の姿勢が明らかになったところで、もう少し例を掲げてみたい。注釈において慶長本の本文について言及しているにもかかわらず、『老のすさび』の和歌本文に慶長本の異文注記が全く見られない例を確認していく。なお、便宜通し番号は振り直して、説明を加えていく。

一 698

標注

おく露のかゝる物とは思へどもかれせぬものは
なでしこの花とこなつ抄

老のすさび おく露のかゝる物とは思へどもかれせぬものは
なでしこのはな

慶長本には、二三の句、ものと思ふらん、
結句は、とこ夏の花とあり。このかたぞ正し
かるべし。(以下略)

この例では、「二三の句、ものと思ふらん」と慶長本の本文を紹介し、結句も「とこ夏の花とあり」とするが、『標注』を見る限

近世庄内歌壇における『後撰和歌集』

り「とこなつの花」は季吟『八代集抄』の本文で、実際に『八代集抄』に「とこ夏イナでしこのはな」とある部分である。『老のすさび』は、こ
こでも『標注』の異文注記を見誤った可能性が高いと思われる。そ
して「このかたぞ正しかるべし」と誤認した部分を含めて、慶長
本を正しい本文と認識しているのである。

二 724

標注

君を思ふ心六帖 忠孝 是慶を人にこゆるぎのいその玉もやいま
もからましや慶

老のすさび 君を思ふこゝろを人にこゆるぎの磯の玉藻や今
もからまし

こゝろをのをは、慶長本に、はとあるぞよろ
しき。玉藻をからんとて人にをくれしとはや
るをこゆるとは云ひかけし也。(以下略)

三 786

標注

道しらでやみやはしなぬあふ坂あゆの関あゆのこなたは
うみといふなり

老のすさび みちしらでやみやはしなぬ逢坂あふのさきのあなた
はうみと云也

やみやはしなぬは、慶長本には、やみやはし
ぬるとあり。これもしかるべし。かゝる誤字

四 807 詞 標注

あるべし。やまぬぞといふ心なり。
ふみつかはしける女のは、の恋をしこひばといへりけるが、としごろへにければつかはしける文つかはしける女の母の恋をしこひばといへりけるが、とし頃へにければつかはしける

ふみつかはしける女の母の古今集なる、種しあれば岩にも松は生にけり恋をしこひば逢はざらめやは、といへる其一句をとり出て、をここに其心をえさせつるなり。慶長本には母はなし。

六 966 詞 標注

人をおもひかけていひわたり侍りけるをまちどほにのみ侍りければ、
老のすさび 人をおもひかけていひわたり侍けるをまちどほにのみ侍れば

にのみ侍れば

まちどほは、慶長本に「人のあはでまつ事、

日比をすごし云々」ともあれば、あはむ事の

まちどほなる也。（以下略）

七 1352 標注

いとゞしくすぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへるなみかな
老のすさび いとゞしく過ゆくかたの恋こひしきにうらやましくもかへる波かな

しくもかへる波かな

（上略）過ゆくは、慶長本、過にしとあるに

したがふべし。（以下略）

五 943 標注

人ごとのたのみがたきは難波なる芦のうらばのうらみつべしな
老のすさび 人ごとのたのみがたきは難波なるあしのうら葉の恨みつべしな

の恨みつべしな

（上略）慶長本には、うらみつるかなと有。

すべていは言にはよさまにいへど其詞の如

くのみはえあらず。されば頼みがたければ、

恨つべしとなり。

以上の六例は、慶長本の本文を掲げないまま、慶長本本文に言及したものである。二「慶長本に、はとあるぞよろしき。」とし、七の例でも「慶長本、過にしとあるにしたがふべし。」として、慶長本本文の優位性を説いている。

三においては「慶長本には、やみやはしぬるとあり。これもしかるべし。かゝる誤字あるべし。」として、これも慶長本の本文の妥

当性を認めている。「誤字あるべし」という本文への態度は、『後撰集新抄』などにもしばしば現れるものである。

ただし、例えば四では、「慶長本には母はなし。」としたのであれば、恋人の女性が直接語りかけたことになり、和歌の解釈にも反映されそうであるが、その言及はない。

八 1058

標注

せきもあへず涙の川のせをはやみか、らん物と
思ひやはせし

老のすさび

せきもあへず涙の河の瀬を早みか、らむ物と思
ひやはせし

(上略) 慶長本には三の句と一の句と入かへ
たり。さらばいと続きのよろしく聞ゆる也。

下句は涙の甚しきをさしてか、らむものとは
忘れざりし始にはおもはざりしなり。かく
いひてわすられたるなげきの深きをきかせた
り。慶長本、四句ながれん云々とあり。流れ
に泣れをそへたり。

この例において、「慶長本には三の句と一の句と入かへたり」とは、少なくとも『標注』の記載からは読み取ることができない。あ

近世庄内歌壇における『後撰和歌集』

えて推測すれば、「慶長本後」という和歌配列に関する注記を、ここでは初句が後に回って三句と入れ替えるとの指示と解釈した可能性が指摘できそうである。『老のすさび』の指摘は、四句目「流れ」に「泣かれ」の掛詞の指摘はそのとおりではあるのだが、果たして三句と初句を入れ替えて「瀬をはやみ涙の川のせきもあえず」として「いと続きのよろしく聞ゆる」かどうか、疑問でもある箇所である。が、違った観点からは、慶長本の本文を重視する姿勢を窺うことのできる箇所でもある。

九

1384 詞

標注

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに
西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに

老のすさび

四條のみこは雅子内親王、女四のみこは勤子
内親王。延喜の皇女。山にては築山を云なる
べし。慶長本にはこ、を、西四條のみやのか
へで、松山にてとあり。

一〇 1403

標注

ひとりゆくことこそうけれふるさとのならのな
らびて見し人もなみ

老のすさび

ひとりゆくことこそうけれふる里のならの並び
て見し人もなみ

（上略）慶長本には「むかしならびて」とある方まされるにや。さらば双びてに奈良をそへたり。（以下略）

九では、慶長本本文を「西四条のみやのかへで、松山にて」としている。『標注』の異文注記からは「西四条のみやのかへての山にて」か「西四条のみやのかへて山にて」と復元されるはずで、「松山」という語が出てくる理由が不明である。

一〇の例では、慶長本の異文が『標注』には一つもないにも関わらず、六帖及び伊勢集の異文注記を慶長本のもと誤認している。この本文を採るのであれば、掛詞の指摘は穩当であるのだが、慶長本本文ではないものをも誤認した上で、優位としている。

以上、和歌や詞書に慶長本の異文注記がない一〇例を掲げた。前節に続いて慶長本の優位性を認めている例が少なくないが、一方で何らかの事情で慶長本の本文と誤って認定した例も多い。こうした誤認が生じた理由は不明であるが、慶長本本文を傍注の形で取り入れなかったことが、誤認につながった可能性はあるかもしれない。

なお、特筆すべきこととして、慶長本の引用が、巻九（恋一）以降に頻出することである。それ以前には全く慶長本についての記述は見られない。このことが何を意味するのか、気になるところであ

るが、巻八までに慶長本の異文はないのであろうか。次の例である。

一一 399 標注 こせせより ほかのきくをうつしうゑて

六帖 里をわかれてさける菊のはなたびながらこそほふべらなれ

老のすさび ほかの菊をうつしうゑて 一本、ことゝこ

ろよりと有。

ふるさとをわかれてさけるきくのはなたびながらこそ句ふべらなれ

ふるさと、は、旧来生て有し所をふるさと、はいへり。たびながらは、例のたびの其俣にての意。にほふは、咲句ふ事なれども、故郷に異ならず旅のま今わが咲たる所なれば、十分に、ほふといふ意なるべし。拾遺、いづこにも草の枕をすゝむしはこゝをたびともおもはざらなむ。新古今、女郎花野べのふるさとおもひ出てやどりし虫のこゑや恋しき。

巻七の和歌である。標注では、「慶」と慶長本の校異であることを明示しているが、老のすさびでは、「一本」として注記している

に過ぎない。注釈でも、和歌中の言葉に注を加えながら、最後に拾遺集と新古今集の用例を記して、異文については触れていない。

次の例は、巻四の例である。

一二 標注 うきものと思ひしりなばうの花のさける垣ねも

たづねざらまし

なんば

老のすさび うきものとおもひしりなばうの花のさける垣ね

はたづねざらまし

なんば

うしと見つゝといふを受て、さばかりうきも

のとおもひしりたまはゞ、たづねたまふべく

もあらぬを、真実にさは思ひたまはねばこ

そ、たのみも尋ねもしたまふなるべしとな

り。異本のたづねざらなんは、さばかりうし

と思はゞ、たづねたまふ事なかれとなり。

この一二でも、「イ」として掲げた異文は、標注では慶長本の本文である。そして、『老のすさび』の注釈の中で、「異本のたづねざらなんは、」と異文の解釈をも示しているのである。

ただし、結句の「なん」という異文記載は、『八代集抄』にもまた『後撰集新抄』にも「イ」として同様に掲げられており、『標注』

から引用したと断言はできない。『老のすさび』には、凡例はなく、異文をどのような本から引用したかは、全く不明であり、『老のすさび』の異文注記が『標注』からだけではない可能性もある。

しかし、服部正樹は、このように異文による読みをも考慮することが後撰集の解釈では有用であると考えたのかもしれない。そして、少しずつ異文に注意を払うようになって、巻九以降では、特に「慶長本」という異本を注目したものかもしれない。憶測するしかないのであるが、注釈を進めていくうちに、流布本の本文だけでは飽き足らなくなつて、より作歌事情が詳細な慶長本本文に惹かれていったとも考えられようか。

五 結語

服部正樹『後撰老のすさび』における、慶長本注記について考察を試みてきた。『老のすさび』における慶長本の本文撰取は、一節で述べたように、恐らく『標注』の慶長本注記を取り入れたものと考えられる。ただし、本稿では『老のすさび』が慶長本に関する引用や注釈を行っている部分にのみ考察を加えてきたが、『標注』の慶長本引用は実際にはさらに多い。『老のすさび』が、無批判に『標注』の慶長本注記を採ることはしていないことも事実である。

二節において述べたように、慶長本の独自歌として『標注』が引

用している和歌一四首についても、『老のすさび』はほとんど触れていないことになる。三、四節においては、『老のすさび』が慶長本の本文に優位性を認めている例が多いことが確認できたが、だからといって、『後撰和歌集』全体において、慶長本を復元しようといった発想は恐らくなかったものと思われる。

そうした注釈態度には、異本系本文を参看することで、『後撰和歌集』の内容を明確に把握しようとした姿勢と見てとれることもできそうである。『八代集抄』などには見られない姿勢といっても良いと思われる。

ただし、こうした『老のすさび』の注釈態度の中には、『標注』の異文を慶長本と誤認した例が多く見られることなどの瑕があることも事実である。ある意味では、『標注』所引の慶長本の独自歌一四首のうち、二首引用して、一首しか注を付けていない点についても、恣意的な印象は免れ得ない。その点では、現代の注釈のような厳密さは望み得ないことにはなるものの、服部正樹、ひいては、庄内歌壇において、従来の注釈をそのままに取り入れるのではない注釈活動が行われていたことは評価しても良いのではないか。

庄内歌壇は江戸時代後期によく活動して、多くの歌人を輩出した。服部正樹の業績は、和歌文学への高まりが注釈作業となった点の特徴の一つとしてあげられる。別の角度から見た場合、庄内歌

壇における和歌の担い手はほとんどが武士階級であり、幕末の動乱の中で和歌文学に力を注ぐ状態ではなかった。そのような政治情勢の中で、服部正樹は三代集の注釈を手がけ、完成したのは明治十年以降と思われる。新しい政治体制の中で『古今老のすさび』など三部作を明治天皇の東北巡幸の折に奉獻しようとするが叶わなかったものの、右に見てきたような異文をも参照した注釈態度などは、動乱期であることも加味すると、地方の和歌研究史の一端に、『後撰老のすさび』も評価の対象として加えても良いように思われるのである。

注1 藤田洋治「『百首略解』の翻刻と考察―近世後期庄内歌壇の側面」山形大学紀要（人文科学）第十九卷三号、令和二年二月。および、藤田洋治「白井固『百首略解』の注釈方法」函館国語第三五号。令和三年一月。

注2 藤田洋治「服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容」山形大学紀要（人文科学）第十九卷第四号。令和三年二月。それ以外には触れた論考は探せない。

注3 「後撰和歌集慶長本の性格」〔文学・語学〕第六号、昭和三十二年（二月）

注4 『後撰和歌集の研究と資料』昭和四一年一月。新生社。

注5 『後撰和歌集 校本と研究』昭和三十六年。誠信書房。

注6 「後撰和歌集の伝本」〔女子大文学〕第一七号、昭和四〇年十一月）

注7 『後撰和歌集諸本の研究』昭和四六年三月。笠間書院。

注8 『岸本由豆流 後撰和歌集標注』妹尾好信編著。平成元年九月、和泉書院刊。以下、本文の引用は、基本的には同書に拠るが、私に版本に当たって改めた箇所もある。

注9 注2に同じ。

注10 『八代集全註』（山岸徳平編著、有精堂出版、昭和三五年七月刊）以下の後撰集抄の引用もこの本に拠る。

注11 『後撰和歌集全釈』（木船重昭著、笠間書院、一九八八年一月刊）『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（片桐洋一校注、岩波書店、一九九〇年四月刊）『後撰和歌集』（工藤重矩校注、和泉書院、一九九二年九月刊）『和歌文学大系 後撰和歌集』（徳原茂実著、明治書院、二〇二二年五月刊）

付記 本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号19K00316）「近世後期における地方歌壇の和歌文学研究——山形県庄内地方を中心に——」の成果の一部である。

A Consideration of Annotative Works of
“Gosenwakashu” in the Shonai Poetry Circles in the
Late Modern Period:
Focusing on the Commentaries on the
Keichobon in “Gosen-Oinosusabi”

FUJITA Yoji
KAWAI Kenji
FURUTA Masayuki

In the Shonai poetry circles, where waka literature flourished in the late modern period, interest in waka poetry grew, and annotative works were undertaken. Among them were the commentaries compiled by Hattori Masaki, which annotated all the waka poems in the Sandaishu. The present study has found that one of his commentaries, “Gosen-Oinosusabi,” an annotation of the “Gosenwakashu,” was written with reference to the earlier commentaries, Nakayama Umashi’s “Gosenshu-Shinsho” and Kishimoto Yuzuru’s “Gosenwakashu-Hyochu.” “Gosen-Oinosusabi” contains quotations from variant texts of the Keichobon, a different version of “Gosenwakashu.” The present study has examined the quoted texts from the Keichobon and revealed the annotative attitude of “Gosen-Oinosusabi,” in which Hattori made use of “Gosenwakashu-Hyochu” and interpreted the quotations in his own way despite some errors.